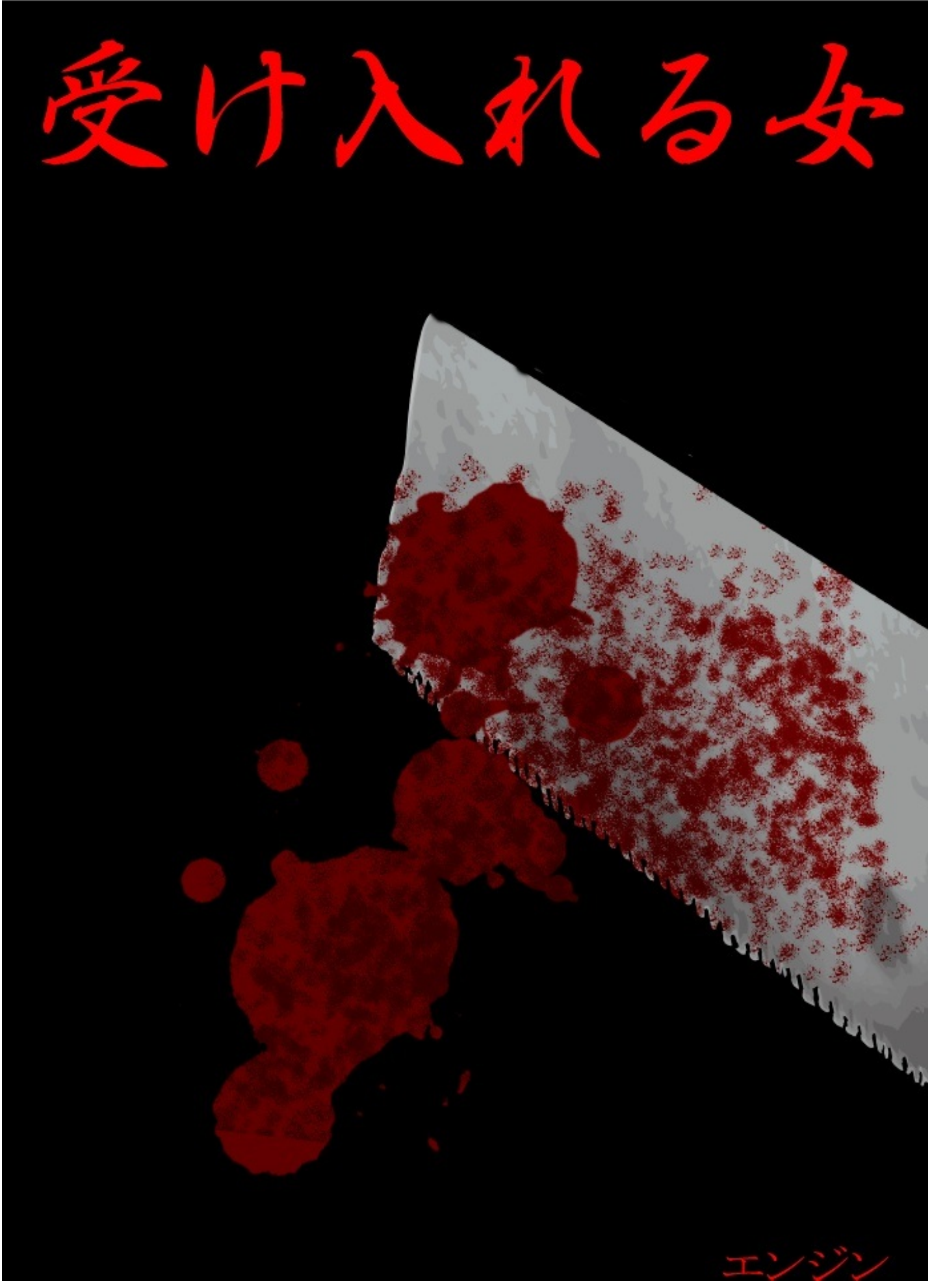
受け入れる女



エンジン

壁に凭れた女が俺を見ている。周りには朽ちかけた材木とガラス片が散乱している。

懐中電灯の光に照らされたその目玉は、黒髪の隙間からただじっと俺を見つめている。猿轡に隠された唇は、どのような表情をしているのだろうか。小屋の外から梟の鳴き声が響く。建物が古いからだろうか、小屋の中にも声が入り込み、酷く反響するように感じられる。

懐中電灯で女の体を照らす。紺色のセーラー服に包まれた華奢な胴体、ピンとやわらかく伸びた足、くっつけるように縛られた両手の無加工ながらも整った爪が、懐中電灯の光をこちらへ反射する。

苦労して買った医療用のノコギリを持つ手に汗が伝う。大事の前は、やはり神経が張り詰める。ようやく、この女を滅茶苦茶に出来るのだ。

一年前、シャッターが目立つ商店街の外れ、人もほとんど通らない薄暗い道で、俺はこの女を初めて見た。

派遣先からクビを切られ、怒り不安悲しみで頭をかき 回されながら歩いていたこの俺の目の前を、廃屋から覗くわずかな夕日に照らされた長い黒髪のセーラー服が通り過ぎていった。ひょっとすると、いつもすれ 違っていたかもしれない。だが、その女を認識したのは、その日が初めてだった。

引き千切りたい。歩き去っていく女の背中を見て、そう思った。だがすぐにそれを否定した。その頃はまだ倫理が残っていた。

翌日の夕方、俺はまた、同じ場所にいた。女もまた現れた。おそらく高校二年生ぐらいだろうその女は、俺と同じ人間とは思えぬほどに繊細な足で歩き、一瞥もせず俺の前を過ぎ去っていく。

ぶち壊してやりたい。昨日とよく似た感情が蘇ってきた。

最初、俺はこれをある種のレイプ願望だと考えた。だが、自室に閉じこもり、暗闇の中でよくよく考えてみると、そうではなかった。あの女をしゃぶりつくしてやりたいとか、ぶちこんでやりたいとか、そういう妄想をしても欲が沸かない。それに関する具体的な妄想が全くできなかったのだ。そうではなくあの女の目玉を抉ってその空洞をしゃぶり尽くしてやりたいだとか、大鉈で上半身と下半身を真っ二つにしてそのま ま内蔵を引きずらせながら這いずり回らせてやりたいとか、そういう妄想が、俺を狩り立てるのだと気が付いた。

それでも、最初は妄想の中だけだった。毎日夕方、あの女といつもの場所ですれ違い、そうすることで妄想の材料を補充し、夜に悶々と頭の中で女を虐殺するだ け。だが、もう我慢ができなくなってきた。仕事もない金もない毎日、 妄想だけでは苛立ちを解消できない。やりたい。引き千切ってぶち壊して真っ二つにして殺してやりたい。悩んだ末、俺は決意した。

　思いの他、事はすんなり運んだ。人生で初めて、事前にしっかり計画を練ったからかもしれない。いつもの道でいつも通り女とすれ違い、去って行く女の後頭部をセロテープ台で思いっきり殴ってやった。女は大きく一回体を反らせると、そのまま前に倒れ気を失ったが、痙攣はしなかった。上手く殺さず気絶させせること ができた。

　次に、側に停めてあったレンタカーの後部座席に素早く女を乗せ、手足を縛り上げ、猿轡をした。そしてそのまま、今いる林へ車を走らせた。

　車を停めた時、女は既に目覚めじっとこちらを見ていたが、抵抗らしい抵抗は見せなかった。

　予め調べておいたこの小屋に行くまでの道中、女の上半身だけを持ち、足を引きずる形で運んだのだが、途中、何度か手を離してやった。女は頭を地面にぶつけ、小さな体をよじらせた。

髪を引っ張って女を持ち上げてやると、頭皮に血が滲んでいるのが見えた。そこを思いっきり引っ掻いてやると、猿轡に掻き消されはするものの、女はわずかに悲鳴を上げる。

まだだ、もっと残忍で、快感なことをやるのだ。よじらせる身体が無くなってしまうぐらいの。

俺は大きく深呼吸をした。照らされた光の中、相変わらず女は俺をじっと見つめている。その目玉からは恐れが読み取れない。人間、恐怖が限界まで来ると、恐れの表情すら無くなるのだろうか。背中にゾッとしたものが走ったようで、むしろ俺は気持ちの良い興奮を覚えた。女の顔を思いっきりぶん殴ってやった。 女の身体が大きく横に傾き、倒れる。顔の間近に光を当ててやると、眩しさで顔をしかめた。

いよいよだ。懐中電灯を女の顔を照らす位置で固定し、女を壁に寄りかからせた後、俺はノコギリを手に持った。そして、それを女の右肩に当てた。女の顔を見る。今から自分の身に起きることを想像しているのだろうか、両の目玉が泳ぐように左右している。

ご期待通り、そのまま力一杯引いてやった。セーラー服とともに肌の皮が裂け、赤い肉と血が見えた。女の顔を覗き込むと、目玉が歪んでいる。猿轡越しだが、 歯を食いしばっているようだ。これだ、ずっとこれがやりたかったんだ。臓器が踊っているような嬉しさ。もう一度、女の右肩にノコギリを当て、今度は表情を 伺うことなく、素早く何度も引いた。猿轡越しに聞こえる、小さく甲高い声。それに呼応して、手の動きはますます早くなる。

女の肉は最初、オレンジのように柔らかかったが、途中、急に硬くなった。なので、もっと力を入れて引いてやった。鈍い音とともに、女の肉に白い粉末が飛び 散る。夢中になって引いた。引いて、押した。何度も何度も。女の腕がどんどん削れ、身体から離れていく。そして断続的に聞こえる、猿轡越しの悲鳴。この快感とともに、とうとう俺は女の右腕を落とした。

女の大きく深い呼吸がわずかに猿轡を押し上げる音が聞こえる。断面が真っ赤に染まった右腕を拾い上げた。纏わり着いたセーラー服の裾がゴミ袋に見える。赤い肉の塊を舐めてみる。塩っ辛いと思ったが、意外にもやや甘酸っぱい。苺にちょっぴり塩をまぶすと、こんな味になるのかもしれない。

女の顔を見やると、涙混じりの眼でこちらを睨んでいる。その眼の表情は、酷くいびつに変化しているように見えた。苦痛の為だと思うが、見方によっては笑っているようにも思える。その唇を見たくなった。次は大鋏で唇を切るのも良いかもしれないとも考えた。

　猿轡を外して、女の顔を見た時、俺は恐怖を覚えた。女が恐怖していなかったからだ。その唇に浮かんでいたのは、笑みだった。

「左腕も、して下さい」

　頭が混乱して動けない俺に、女は話しかけてきた。

「ねえ、左腕も、切り落として。お願い、早く・・・」

　若干の幼さを含んではいたが、何とも艶かしい声だった。

　いや、そうだ、何てことはないのだ。この女は苦痛のあまり発狂したのだ。何を怖がっているんだ、俺は。女がわざわざ自分から求めているんだ、切り刻むんだ。

　女の左肩にのこぎりを当て、思いっきり引き裂こうと力を入れる。女の肩肉が深く削れていく。ああ、というもどかしい女の声が揺れるように放たれる。やがて乾いた音がして、女の左腕が地面に落ちた。

　女ではなく、俺の呼吸が乱れている。

　彼女は愛おしそうに眼を細めながら、自分の両腕の断面を見回している。

「わたしの腕、もう無くなっちゃったんですね、何だかふわふわしてます」

　そう言った後、女は俺に向かって微笑んだ。十代の女の子らしい、裏のない笑顔、そして醜く抉れた、両腕があるべき断面。ますます滅茶苦茶にしてやりたくなった。

　俺は側に置いていた工具箱からゴム製の大きなハンマーを取り出し、女の左足の付け根に力一杯振り下ろした。黒く染まる足の付け根。求めるような女の喘ぎ声。

「きゃあっ、痛い・・・」

　更に今度は伐採用の斧を取り出し、同じ箇所に叩きつける。足の付け根に大きな谷が出来た。もう一度叩きつけると、足はほぼ完全に身体から離れてしまった。 恍惚とした女の声に気を乱されながら、一気に右足にも斧を振るう。位置が良かったのか、右足は一回で皮一枚が繋がっている状態になった。

　残った足肉を抉るようにして斧を取ってやると、また女が話し掛けてきた。

「私、もうだるまさんみたいですね」

　顔に飛び散った血を舌で掬い取って味わった後、女は俺に再度微笑みかけた。その微笑みにゾッとさせられた。発狂しているとは言え、あまりにも余裕がありすぎないだろうか。それとも、発狂すると、人間はここまでおかしくなるものだろうか。　そもそも、これだけの血が流れているのに、何故この女は死なないのだろうか。

　気を取り直し、工具箱から新品の包丁を取り出した。ここまで来たら、何があろうと引き返してはならない。欲望の趣くまま、あのセーラー服に血を滲ませるんだ。

「お願いします、しっかり切り刻んで下さいね」

　女は相変わらず屈託のない笑顔を浮かべている。この顔を見ていると、余計、この女を切り刻みたくなってくる。女の下服部に包丁を当て、ゆっくり、ゆっくり押し込んでいく。分厚い紙の繊維をゆっくり千切るような感覚。

「もっと、もっと、刺してください・・・ほら、セーラー服が血で汚れていっちゃう」

　その潤いのある声に、身体中の産毛が逆立つような感じを覚えた。何故この女は、ここまで惨い身体になったのに、穏やかに笑っていられるんだ。

　そうだ、あの時――俺が彼女を初めて見た時も、似たような印象を受けた。確かに目の前に存在しているにも関わらず、どこか現実と乖離している、不思議な女。地に這いつくばり、今にも現実に押しつぶされそうなこの俺とは、全く対照的だった。

　それを繰り返している内、刃の先に伸びたゴムのような緩い弾力を感じた。そこでハッと我に返った。包丁は肺の中央、気管支を貫通していた。よく確認してみると、その他急所に相当しそうな部分にも刺し傷が出来ている。

　女の顔を伺う。無言の女の唇から血が流れ、赤黒い肉で赤く染まりぼろぼろに切り刻まれたセーラー服に沈んでいく。

　殺してしまった。　楽しみが終わってしまった。

　その途端、この後の出来事の予測図が脳内に浮かび、背筋が寒くなった。逃走、逮捕、刑務所、死刑。

　突然、今まで恐れてもいなかったことが怖くなりだした。

　逃げよう、とにかく逃げよう。工具箱に凶器を入れ、小屋から出ようとした時・・・・。

「待って下さい」

　声がして、恐る恐る振り返った。

「あたし、大丈夫ですよ。あまりにも痛いのがすごかったから、ちょっと意識飛んじゃっただけです」

　女が変わらぬ微笑みを浮かべ、こちらを見ていた。口から血が水のように流れているのに、声の調子は先ほどと全く変わらない。

「あたし、死なないんです、ほら」

　呆然とする俺を余所に、女は先の無い足を器用に捻らせて右側に進んだ。そこには、壊れた窓ガラスが積まれていた。女は躊躇いもなくそこへ倒れ込む。あたりに響き渡るガラスの音。

　ぞっとする悪寒に促され、窓ガラスに突っ込んだ女の首に懐中電灯を当てた。　血に塗れた鋭利なガラス片。その側にピクリとも動かず横たわっている女の喉笛に大きな裂け目ができていて、そこから鮮血が勢いよく流れ出している。

　次の瞬間、手足のない身体を勢い良く跳ねさせて、女が起き上がった。

　驚きのあまり、俺は後ろへ転倒した。背後にあった細かいガラス片が手に刺さり、手のひらが熱くなる。

「あたし、もう、とっくに死んじゃってるんです」

　喉が切れているというのに先ほどと全く変化が無い、怪しい声。

　「一年前、あたしは殺されました」

　俺の心中を知ってか知らずか、女は語り始めた。血に染まった髪に、光の無い瞳、血が垂れた唇と喉笛、赤黒いセーラー服と両腕が切り取られた胴体。腿だけとなった足は斜めに傾き、丁度女座りの姿勢を形作っている。

「突然殴られて縛られて、車に入れられて、気づけばこんな感じのどこか遠くの建物の中」

　女は自分の胸に深々とついた刺し傷の形を見下ろしている。

「散々レイプされた後、アイスピックで滅多刺しにされました。身体だけじゃなくて、顔も、目玉から唇、鼻、もうめちゃくちゃになっちゃって。頭がおかしくなりそうな痛みがずっと続いて、いつの間にか意識がなくなりました。そして気が付いたら、ボロボロにされた自分の身体もセーラー服も元通りのままで、同じ 場所に眠ってたんです。夢だったのだろうか、って最初は思いました」

　この女は一体何を言ってるんだ、聞いているこっちの頭がおかしくなりそうだ。

「でも、今自分がいるのは確かに自分が殺された場所で、目の前には血まみれのアイスピッ クが落ちていて・・・。これは一体どういうことだろう。そうだ、これで確かめてみよう。そう思って、アイスピックを拾って、思い切って自分の心臓に刺してみました。すごく痛かったし、血もどんどん流れてきました。でも、死ななかったんです。血が床を真っ赤に染めたのに、何時まで経っても・・・」

「幽霊・・・？」

　声を腹から捻り出すようにして、俺は言った。

「わかりません。あたし、そういうこと知らないんで・・・」

　女はわずかに笑みを浮かべた。その表情からは悪意のようなものは読み取れず、そのことが余計に俺を恐怖させた。

「その後、何だか悲しくなってきて、周りが暗くなってきて、ハッと目が覚めると心臓のキズも無くなってたんです」

　女は自分の心臓に右手を当てて、こちらを見つめている。

「その後、何時間も歩いて、たまたま停まっていたバスに乗って家まで帰りました。でもあたし、誰にも会えなくなっちゃったんです。会えないというか、誰もあたしを認識してくれないんです。バスの運転手さんも、他のお客さんも。それに、誰もあたしのことなんか気にしてなくて・・・」

　その無邪気な顔が、僅かに曇った。

「元々仲が悪かった父親は、あたしがいなくなったのにそ知らぬ顔。友達もあたしのことなんか全然気にしてなかった。そこで自分が本当に死んでるんだなって実感できて、どうしようってずっと学校と家の周りをフラフラしていたんです」

　女が上目遣いに俺を見つめる。体中の体温が一気に奪われそうな感覚がしてくる。

「それでその内、すごく変なんですけど、あの時の、殺されちゃった時の痛みがすごく恋しくなって、自分で自分を殺すようになったんです。例えば、拾ったハサミで自分の目玉を突いて潰してみたり、果物ナイフでゆっくりお腹を切ってみたり。すごく痛いんですけど、気持ちよかったんです。でも、それだけじゃ足りない。誰かからの一方的な痛みじゃないとダメ。そう思うようになった時、あなたが・・・」

「俺・・・？」

　唾すら飲み込めない程の震えが体中を走った。己の考えている以上にこの状況が常軌を逸しているのか、改めて実感した。

「商店街の外れであなたとすれ違った時、本当に少しだけだったけど、私の方を見てくれましたよね。私の後姿をじっと見てたのも知ってます。あの時はびっくりしました。あなたなら、あたしを救ってくれるんじゃないかって」

　そう言うと女は俺の側に手足のない身体を転がし、上目遣いで見つめてきた。

「ねえ、あたしを傷つけて下さい。痛みが欲しいんです。お願いします、ねえ・・・」

　顔を摺り寄せてくるその首筋から流れ出る血が、俺の膝を伝う。

　俺は女の顔を思いっきり蹴飛ばし、工具箱からレンチを取り出した。そしてその顔を何度も何度もレンチで殴り倒した。肉が潰れ、骨が砕ける音とともに、女の歯が、鼻が、目玉が砕けて醜くおぞましくなり、肉塊と化していく。

「ああ、いいっ！　もっと、もっと殺してください！」

　女の声は依然止まない。もはや男とも女とも判別が付かない程に変形した、砕けた石榴のような顔は全く動い ていない。頭の中に響くこの声を止めるために、　俺はとにかく女の体中を繰り返し殴り続けた。顔、腹部、腕、腰、膝。とぐろを巻いたような腸に、黄ばんで酸臭を放つ胃、他の何よりも紅い心臓まで、何から何まで叩き潰し続けた。女の身体がどんどん砕け、破れた皮膚からは血と肉骨が飛び出す。

「もっと酷く！　もっと醜く！　あたしを跡形もなく破壊して！」

　数十分は殴り続けただろうか。気が付くと、女は黒と桃色の肉塊と化していた。俺は大きく息を吐き、その場にへたり込んだ。　やっと悪夢が終わったのだと思った。

「ありがとうございました。あなたとずっと永遠にーー」

　頭に響く女の声が言い終える前に、　俺は自分の喉を切った。鋭い痛みとともに血が噴き出し、意識が薄れていく。

　目を覚ました時、目の前に女が座っていた。顔にも服にも、手足にも傷一つない。女は涙を流していた。

　そしてまた、俺自身の目からも自然と涙が零れ落ちた。

　それ以来、もはや何十年経ったか分からないが、俺は彼女と二人でずっとこの山小屋の中にいる。朝や夜は訪れるが、人が来るといったことは今までに一切ない。食事や睡眠も、外へ出ることも立ち上がることもなく、ただじっと彼女を見つめているだけだが、不思議と退屈しない。

　衰えることのない彼女の瞳もまたじっと俺を見つめ、時々微笑みを返してくれる。そんな時、俺はとてつもなく救われた気分になる。

（完）

　だから、俺はこの女を破壊することにしたのだ。恥も倫理もない、どうせこのまま仕事を得られず、ホームレスになって野垂れ死にするなら、こいつを無茶苦茶にしてやってから自殺してやる。

　彼女から漂う不可思議な魅力が、俺を凶行に走らせた、それだけだ。

　目の前にいる、もうすぐただの肉の塊と化す女が笑おうが泣こうが、後戻りはできない。

　そう自分に言い聞かせると、サディスティックな欲求が再燃した。
　つい勢いに任せ、女の腹のあちこちを素早く何度も力任せに刺してやった。刃先から伝わる、骨と肉の感触。どの臓器を突いているのかが、その柔らかさで何となくで分かる。

「ひっ、あっーーすごい、ああっ」

　鋭利な衝撃に耐えているかのようなか弱い声。包丁が出入りする度に、女の身体は小刻みに震える。

　だから、俺はこの女を破壊することにしたのだ。恥も倫理もない、どうせこのまま仕事を得られず、ホームレスになって野垂れ死にするなら、こいつを無茶苦 茶にしてやってから自殺してやる。彼女から漂う不可思議な魅力が、俺を凶行に走らせた、それだけだ。目の前にいる、もうすぐただの肉の塊と化す女が笑おう が泣こうが、後戻りはできない。

　そう自分に言い聞かせると、サディスティックな欲求が再燃した。

　つい勢いに任せ、女の腹のあちこちを素早く何度も力任せに刺してやった。刃先から伝わる、骨と肉の感触。どの臓器を突いているのかが、その柔らかさで何となくで分かる。

「ひっ、あっーーすごい、ああっ」

鋭利な衝撃に耐えているかのようなか弱い声。包丁が出入りする度に、女の身体は小刻みに震える。

受け入れる女

http://p.booklog.jp/book/93794

著者 : エンジン
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/lazeengine/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/93794

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/93794

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ